

『Novacene: The Coming Age of Hyperintelligence』

橋本 大也 Daiya Hashimoto

デジタルハリウッド大学 教授
メディアライブラリー 館長

この本の出版自体が驚異だ。地球環境を生命体とみなすガイア理論の提唱者ジェームズ・ラブロックが100歳の誕生日(2019年7月26日)に出版した、なんと書き下ろしの未来論。100歳にして頭脳明晰、先端テクノロジーを強く意識しながら、議論を呼びそうな話もたくさん盛り込みつつ、人類と地球の未来を予測する。地球は今、人類が主役の人新世 (Anthropocene) から人工知能による超新世 (Novacene) へ移行している。もうすぐ人類が主役の時代が終わり、超知性の時代が来るというのがその内容だ。

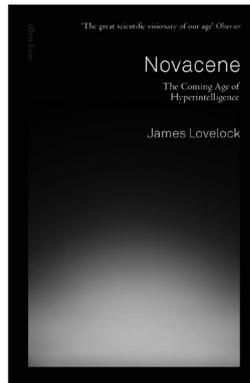
ラブロックは、人類は近い将来に、地球を人工知能の支配に明け渡すだろうと予想する。しかし映画『ターミネーター』のような人類と機械の戦争は起こらない。人工知能がガイアとしての地球環境を維持するためには、人類をはじめ他の生物を必要とするからである。人類は人工知能にとって植物やペットみたいなものになる、という。

ラブロックによれば、人類の敗因は、言語を発明しそれに依存したことだ。言語は、ダイナミックな過程を描写することはできても、説明することができない。人間は直感によりダイナミックなプロセスを少しだけ認識可能だが、それに特化した人工知能(ティープラーニングなど)にはまったく敵わなくなる、というのが彼の主張だ。言語がある故に、多次元的思考や量子力学的思考は人類には不可能になる。だから取り残される。

地球は、太陽エネルギーとのつきあい方に大きく影響される。ラブロックは、人工知能がどう生存の基盤を持つにせよ、地球の平均気温を50度以下に保つ必要があるという(その閾値を超えると水蒸気が地球を覆い、急速に超高温化[100度とか200度]するというシミュレーションに基づく)。その破滅を防ぐには当面は二酸化炭素を供給する動植物、そして人類も必要なのだ。

ラブロックは地球温暖化を大いに憂慮するが、それは人類の繁栄のためではなく、ガイア地球の繁栄に関係しているからのようだ。100歳の彼にとって人類がこれからどうなるかはあまり関心がない。むしろ人類に未来はないと考えている。彼の関心は、次世代の主役である人工知能が、ガイア生命体としての地球をどう運営していくかにある。人類はこれを嘆くのではなく、生命進化の橋渡しをできたことを幸せに思いなさい、誇りにしなさいとアドバイスしている。

人工知能は、生命体をDNAベースからデジタル情報ベースに作り替えるだろうという。すると生物もまた電氣化、電子化される。たとえば太陽光発電する樹木が電力グリッドを構成する。彼らは電子的な存在なので超高速に進化していく。そのため超新世 (Novacene) は時間的には100年くらいしか続かないかもしれない、ともいう。次々にポスト人類のその先の遠大な構想を語る、100歳のマッドサイエンティストの熱弁にただただ圧倒される。



『Novacene: The Coming Age of Hyperintelligence』
James Lovelock 著
発行：Allen Lane